
盃

螢石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

盃

【Nコード】

N9221T

【作者名】

螢石

【あらすじ】

鳩が京都への出入りについていくことを決心するお話。
補完小説と思われませぬ。

いつも出入りをしたと後から聞かされる鳩は、今日も出入りに置いて行かれたと知り、リクオの家に殴り込むが。 (サイトからの転載です)

鳩の憂鬱

「鳩」

低い声に、鳩は「ああ」と返す。

「行くぞ」

たなびく銀の髪が風に揺れ、鋭い光を宿した金の瞳は遠くを見るように僅かに眇すがめられた。整った顔立ちは、自信を表してか薄い笑みを刷いている。

京の地に降り立つたリクオは、その身に前よりも格段に強くなつた畏れを宿して、その瞳を鳩へと向けた。

「もう後戻りはできねえぞ。覚悟しろよ」

とーぜんだ、覚悟なんかとつくの昔からできてらあ。

豪快に笑つてそり返すと、リクオはふつと微笑んだ。

「なら、京で百鬼夜行とふれこもうか」

祖父も父も体が弱かった。だから、百鬼夜行に加わることはほとんどなかった、という。

けれど、一度百鬼夜行の後ろに並べば、鳩の羽は多くの敵をその毒で倒してきた。

おれだつて、リクオの百鬼夜行に加わりてえし、加われる實力はあると思う。

ただ、ほかの奴よりちいつとばかし体が弱いつてだけで。

「連れて行くだけでもかまわねえつて言つてんじゃねえか。おれだつてリクオの百鬼夜行なんだからよあ」

今日も出入りをしていたと後から聞かされて、本家にすつ飛んで来たのがついさっきの事だ。時はもう昼を過ぎて夕方になってきている。

妖の領分ももうすぐだ。

もはや、出入りの後の鳩の文句は恒例行事であるかのようになっ

ており、誰も　若頭のリクオでさえ鳩の話を実剣に聞こうとしない。

「だめだったらだめ。鳩君体弱いじゃんか。出入りについてって体壊したらどうすんのさ」

「そーですよ鳩さま。ここはおとなしく薬鳩堂で待っていてください」

リクオの言葉に被さるように、何故か桶を持った首無がひよいと挟んできた言葉に鳩の堪忍袋の緒が切れた。

「なあんでおれだけ！薬鳩堂で待ってなきゃいけねえんだよ！」

青筋を立ててどなる。その瞬間鳩の胸に熱が走った。

息もできない咳と共に、とっさに口元を押さえた手から血液がしどと溢れ出す。

「鳩君！だだ、だいじょうぶ？」

驚いた声で、リクオが心配そうに手を差し伸べてくる。

その優しい手を邪険に振り払って、鳩は悔しい、と顔を歪めた。

「…、う、うるせえっ、おれは……っ。　ちくしょうっ」

どかどかと、足音も荒く鳩は去っていく。それを啞然と見送って、リクオは首無を顧みた。

「……ねえ首無。あの一言はないと思うんだけど」

「……そうでしょうか」

じとりと首無を見やれば、気まずそうに彼は首を揺らした。

「……くそっ」

鳩は腹立たしげにこぶしを握り締め、未だに血の味の残る口内にさらに苛立ちが募る。

少し興奮するだけで、すぐに吐血してしまう弱い体。

ああちくしょう……っ

あまりにもそれが悔しくて情けない。

夜のリクオは、こちらが惚れ惚れとってしまう程に美しい妖だ。

その背に纏う畏れのままに、鳩も付いて行きたいと思うのに。

「毒があるから鳩なのによ…。そのせいで出入りにも置いてかれんのかよ」

それができない歯がゆさに、鳩は「いつそのこと、こっそりと付いて行ってやるうか」などとくだらないことを考え始める。

生まれたときは、それはそれは美しい鳥であるという、鳩。

だが、元服のころを境に、その羽根は猛毒へと変わる。

その毒が鳩の体をも犯しているのか、それとも毒を作るが故の他の要因か、鳩には分からなかった。ただ、鳩という妖怪が生まれたころから、その体は弱かったのだという。

忌々しい。

この毒がなければ鳩の体はもう少し頑丈で、ただの鳥妖怪として、リクオの傍に居ることができたのだろうか。

けれどやはり と、鳩は呟く。

この毒のある弱い体だったからこそ、祖父も父も、ぬらりひよんと盃を交わせたのであるう。だから己も、リクオと盃を交わせたのだろう。

頭では分かっている。

大将と五分五分の盃を交わしたという時点で、それだけで、もう既に他の妖よりも破格の扱いだということは。

いつのまにかこんなに欲深くなっちまった。

一人でそう苦笑して、未だに玄関の傍に止まっていた籠車に乗り込む。

あまりに早い鳩の乗車に、籠車と番頭の蛙の両方から訝しげな声が発せられたが、自らの思考の海に沈んだ鳩を引き上げることは叶わなかった。

「……鳩様。薬鳩堂に着きましたよ」

心配そうな顔でそう言った番頭に「ああ」と空返事を返して鳩は籠車から降りる。

「どこかお体の調子でも悪くなられたのですか？」

不安そうに尋ねた番頭に、鳩はやっと現実へと思考を戻して、青

ざめていた蛙の顔にぷつと吹き出した。

「ななな、なんでございますか！」

途端に緑色の顔を紫にしたものだから、それは余計に鳩の笑いを増長させた。

「いや、すまねえ。ちよいと物思いにふけりすぎた」

安心させるように笑んだが、番頭は不安そうに「すぐに横になつてくださいね」と言つて籠車の見送りに向かう。

一人残された鳩は、新たな部下が薬鳩堂の扉を開けて「お帰りなさいまし」と頭を下げたのに「おう」と返して、ひとまず自らに關することへの思考を止めた。

鳩の憂鬱（後書き）

ここまで御拝読くださり、誠にありがとうございます。

サイトで掲載している小説の中でも、これは初めに書きあげたものです。

そのせいで内容は古めでありきたりではありませんが、何卒よろしく
お願いいたします。（三部終了予定です）

昼のリクオ、鳩の家を訪問す。

妖怪の活動時間である、夜はすぐにやってきた。

本家から帰ってきた時にはほとんど夜となっていたのだから、すぐにとというのは語弊ごへいがあるかもしれない。

満月というには少しばかり細い月を窓から見上げて、そういえば今日は十日目だったな、と頭の片隅でぼんやりと思った。

月の周りだけほんのりと空が金色に色づいて、たなびく雲がその白さを際立たせている。

部屋の中で薬の調合をしていた手を止めて鳩は体をずらすと、窓の外の月と対面した。

ざわざわ。

月に見惚れていると、急に屋敷の中が騒がしくなる。

何事かと思うと、襖ふすまの向こうで「鳩様」と声がした。

「どうした？」

「本家のリクオ様がいらっしやいました」

鳩の問いに答えた声もどことなく動揺している。

「リクオが来んのはいつもの事じゃねえか。どうしたよ」

頭に浮かんだ疑問のままに問うと、「それが……」と言って部下は言い淀む。

「鳩君」

ひたり、と足音と衣ずれがして、声変わり前の高いこどもの声が鳩の耳に届いた。

「……うお！リクオ?!」

驚いた鳩の声を合図にからりと襖が開けられる。

そこにいたのは、常日頃、薬鳩堂を訪れる時には妖怪と化している人間のリクオの姿。

鳩は破顔一笑した。

「珍しいじゃねえか。その姿で此処に来るたあ」

「そついやあ、おめえと盃を交わした時以来か。」

あの時、番頭だった蛇太夫に裏切られた鳩を守るために、再びリクオは妖怪として目覚めた。その姿は今も鳩の胸に焼き付いている。鳩様、それは誠にございますか？」

「このような人間があのリクオだと言うのか。」

そんな馬鹿な、という部下の声に「おうよ」と鳩は闊達かつたつに返す。

「そついやあ、おめえらがこの姿を見るのは初めてか」

「前に来た時は他の部下はいなかったんでしょ？」

あの時は蛇太夫が人払い……妖払いしてたんだよね。

鳩の言葉にリクオが苦笑して言った。

「ああ。わりいな。嫌な思いをしただろ？」
すまねえ。

そつ言つて頭を下げる鳩に、リクオは慌てたように顔の前で両手を左右に振った。

「鳩君のせいじゃないよ。人の姿で来た僕のせいなんだからさ」

「だったら、てめーのせいでもねえよ。初めて見る奴が来たから警戒しただけだろう」

だが隴車に乗ってきたんだろう？

鳩の確認にリクオが頷くと、それで一応ここまで来れたんだな。と鳩が面白そうに笑う。

「鳩様あ……」

放っておかれた部下が情けない声を出し、鳩は「おお、そうだった」と膝を叩いた。

「まあ、つてなわけでこいつはあの若頭だよ。四分の一しか妖怪の血を持ってねえから昼の姿があつてよ、それがこれだ」

「これだ、て鳩君……」

僕は珍獣じゃないってば。

その言い方に不満があつたのか、リクオの眉間に皺しわが寄つた。

「まあ、そう怒んなつて。……んでよ、何の用で来たんでい？」

部下にはあれで納得をしてもらい、今は二人とも客間に移動して

いる。

鳩一派の頭領の住む家とはいえ、薬師一族である故か本家に比べるとやはりこじんまりとしている。他の部屋はほとんど薬と治療室で占められてらあと以前に鳩が言っていた。

「いつもみてえに妖の姿じゃねえってのには、なんか理由でもあんのかい？」

興味深そうに、それでいて本当に不思議そうに鳩は問うた。

「うん。特に意味はないんだ。今日はまだはやいし、だからだと思っただけど」

リクオの簡単な説明で、ああと鳩は頷いた。

関東を一手にまとめる奴良組の総大将であるぬらりひょんは、人と交わる血筋らしく、奴良組をつくった彼の祖父も二代目である父も、ともに人と夫婦めづととなった。

それゆえ、三代目を継ごうというリクオには妖怪の血は四分の一しか入っておらず、妖怪としてその力を振るえるのも、一日の四分の一と限られている。

「そっぴゃあ、あんたが来んのはだいたい夜明け前か夜も更けた頃だったか」

こんなに早く来たことあなかつたな、言われてみれば。

うんうんと頷く鳩に、リクオはもう少ししたら妖の姿になれるという。

「前に僕にね、僕が言ったんだ。“人はお前に任せる。だから妖怪は俺に任せる”

って。だから多分、僕の姿はその時が来たらすぐに変わるよ」

明るい顔で話すリクオに、鳩は納得がいけないと言いたげに頭を振った。

「あのよお、オメーとあいつ、どっちもリクオであることに変わりはないんだろ」

うんと頷くリクオに、鳩は苛立ちいらだちを示すように拳こぶしを開閉した。

「なら、妖怪だろうが人だろうがそんなこと気にすんな。オメーは

オメーだろうが」

そう息巻くと、リクオは一瞬きよとんとしてから、前にも言われたっけ？と微笑んで呟いた。

“おめーはおめーの百鬼夜行を作ればいいんだよっ！”

総大将である祖父のぬらりひょんが消息不明となり、そのような中を四国の八十八鬼夜行が計ったように攻めてきた。混乱し散り散りになりかけた奴良組をリクオは若頭としてまとめようと躍起おどろになつて、倒れてしまった際に言われた言葉だ。

「おお、覚えてたのかい」

「当たり前でしょ。そう経ってないし、いきなりあんなこと言われたら、記憶にも残るよ」

嬉しそうにニツと笑った鳩に、同じように微笑んで「あの時は本当にありがとう」とリクオは頭を下げる。

「なんの。俺はお前の最初の百鬼夜行だからな。当たり前のことをしたまですよ」

本当に嬉しそうに、鳩は大口を開けて笑った。

「でも最初に言っとくけど、妖怪の僕も僕なんだからね」

分かつてる？鳩君。

釘を刺すようにリクオは言った。

鳩はこちらの意図が読み取れないというように首を傾け、「どういう意味でえ」と尋ねる。

「だから、最近は僕は僕って、なんか別れてたのが治った、っていうのかな。ちゃんと僕として妖怪になれる様になった、っていうか。うまく言えないけど、そんな感じなんだ」

分かるかなあ。

そう呟いて曖昧あいまいに笑むリクオは、確かに己おのれが久々に会った頃のリクオとは何かが違うのだった。

「おうよ。当たり前めえだ。リクオは一人しかいねえんだからよ」

三代目らしくなってきたじゃねえか。

そう言いながら嬉しくなる鳩の心とは反対に、夕刻の事が胸の奥

でわだかまり、ああ俺はやはり置いて行かれる側なのだろうか。と嫌な思いが頭をもたげた。

まあこのまま死んじまうつても、それはそれで笑えねえ。せめて百鬼夜行に、リクオの背に並んでから……。

深くなるもどかしさに、鳩は部下に酒を運ぶようにいつける。

そして、それに洩い顔となったリクオを見て笑った。

もうすぐ成人となる妖怪の姿とは異なり、人相応の幼い顔立ちは、妖とは違う時の流れの中であっという間に青年となり男となって行くのだろう。

すぐに妖怪である時の歳なんざあ抜かしてさっさか老いていつちめえんだろうなあ。

その姿が容易に想像できて、鳩は笑いの衝動を口の中で噛み殺す。きつと、この優しい義兄弟は自らを人として留め置き続けるのだ。

どちらも守りたいと、あの明るい瞳で、きつと、そう言っ

それが鳩には眩しく、同時に虚しい。

やはり、置いて逝くのは自分でありたかった。

昼のリクオ、鳩の家を訪問す。(後書き)

第二段の発表でございます！

アクセス数が分かるのって、すごい嬉しいですね(笑)

一人でも読んでくださっているというだけで、もう天にも昇る心地がいたします。

ここまで読んで下さった方々、誠にありがとうございました!!

このお話は、一応次話で終わりとなります。

他のみなさんのように、なっがい話を書いてみたい気もいたしますが、螢石はあんまり長続きしないんですよ……モチベーションが(苦笑)

なんと明日にはマーク模試があります。

あははは……。がんばります。

夜リクオ、鳩と酒を酌み交わす。

夜が更けていく。

闇は一層濃くなり、音は一層影に沈む。

その闇にくつきりと浮かび上がるのは、満月に近い、月。

そんな時、鳩と談笑していたはずのリクオが不意に席を立った。

「リクオ？」

鳩の言葉に、うつすらと笑みを浮かべると、リクオはひよいと彼用に置かれていた徳利と盃を手を取った。

ざわり……と空気が波打つ。

闇が一気に深まったように鳩は思った。

月影に輝く銀の髪がさらりと黒の羽織にかかる。

「夜よも大分更けたな」

やっと俺の領分だ、と言って笑うその姿は、人である時のリクオとは似ても似つかない。

妖怪であるぬらりひよんの血が、表面に現れたのだ。

大人びた美しい容貌に、血を思わせる赤の瞳。たなびく銀の髪は、ぬらりひよんであるが故に長い頭を飾っている。

ひらり、と桜の花びらが夜闇に散った。

「鳩」

随分と低くなった声が、鳩を呼ぶ。

自然と鳩の背筋が伸び、彼は真剣な面持ちでリクオを見上げた。

「…なんでい」

こうして見上げると、リクオが夜を従えているように見える。

巨大な奴良組を率いる器を持つ、その姿。

彼は笑みを刷いたまま鳩の前まで戻ってくると、そこに音を立てずにふわりと座った。

強い光を宿したその瞳に、鳩は畏れを見る。

「そんなに、出入りについて行きてえのかい」

笑みさえも含んだ声でリクオは言った。

いつも土産話を持って来ては話してくれる時の彼とは違う、百鬼の主としての姿。

今日はそれを聞きに来たんだよ、とリクオはふつと微笑う。

「別に、その姿になる前でも良かったんでねえの？」

鳩もにやりと不敵に笑い返し、冗談と本気の混じった言の葉を放つ。

リクオは昼の姿の時でも、気が小さいわけではない。むしろ、牛鬼たちにぬらりひよんの性格を表しているのはこちらの時かと言わしめるほどに、ぬらりくらりとしていながら芯が強い。

そのことについても、容易に鳩に尋ねることはできるはずだった。

「なんとなく、な。出入りの事は、オレの時に聞こうか、と」

珍しく歯切れの悪い言葉を吐いて、リクオは盃に酒を注ぐと、くいと煽った。

「……なんつー理由だ、そりゃ」

苦笑して鳩がそう呟くと、見ようによっては金にも見える瞳が……と向けられる。

そのまま、無造作に掴んだ徳利の首を幾度か振った。

鳩はその意味をすぐさま理解し、彼の前に己の盃を差し出す。

「少しばかり、昼の俺は優しすぎるんだよ、おめえに」

どこを見ているのか分からない瞳で、リクオは鳩の盃に酒を注いだ。

「……だが、それも俺自身だ」

低すぎて聞き取りにくい声が、リクオの唇の端から漏れた。

その声に導かれるように鳩が視線を上げれば、リクオの唇は既に笑みに歪んでいる。

音も気配もなく、徳利は次にリクオの盃も満たし始めた。

意味もなくそれを眺める鳩に、若頭となった義兄弟はぼそりと呟く。

「おめえの気持ちも分からねえわけじゃねえんだよ」

まっすぐな瞳が、淡々と鳩を映した。

「別にお前の力不足ってわけじゃねえ。鳩の毒の強力さはじじいからだが聞いている。それに、俺は実際にお前の畏れを見たことはねえし、見てもねえのに弱いとか決めつけるつもりもねえ。だが、鳩の体が弱いのはどうしようもねえ事実だ。おめえもそれが分かっているから焦ってんじゃねえのかい？」

あまりに静かな声は、鳩の心を見透かしたような言葉だった。

「……なんでい。あんたには俺の心なんざぁお見通しってわけかい
本当に、この若頭ときたら。」

余りに見事に言い当ててくれたものだから、鳩は少々不貞腐れたようになつてリクオが注いでくれた酒を煽る。リクオが持っていた徳利をも奪い取って、さらに酒を喉の奥に流し込んだ。

「深酒は体に悪いぞ」

リクオが笑みを零す。

それは次第に哄笑となつて、鳩の耳を震わせた。

「別にいいんだよつ、このくらいっ！」

「あー、悪い悪い。あんまり叫ぶと血、吐いちまうぞ」

「うるせえっ！」

どうにも俺は若頭である時のリクオに弱い。

ぬらりひよんである彼も、人である彼も、弟の様に思っているの
に。

しばらくして、籠車の到着の知らせと、烏天狗の来訪が告げられる。

「わかあ　　！」

実際の烏よりも小さい体をした本家お目付け役にて奴良組創設時より関わっていた古株の烏天狗は、その真面目な気性ゆえに気苦労が絶えない。

放任主義の祖父とは違い、口煩いリクオの親のような存在である。
すばーんと襖が勢いよく開け放たれ、烏天狗が客間に乱入した。

「いきなり隴車を呼んで鳩様のところへと伺^{うかが}ったと聞きましたぞ！
供もつけずに外出するなど、もつてのほかだとあれほど言ったでは
ありませんか　　！！！！」

その大声に鳩は顔を顰^{しか}め、リクオはやれやれといった様子で腰を
上げる。

「リクオ？」

鳩の訝^{いぶか}しげな声に、「しゃあねえからひとまず今日は帰るぜ」と
言^いって数歩進み、リクオはちらと鳩の方を振り返った。

その口元に、笑みが結^{むす}ばれる。

「どうしても付いていき^いてえ^えってんなら、別に俺は止めねえ。だが、
それなりの制裁は覚悟しておけよ。俺は、お前を守ると盃を交わし
たんだからな」

「

“ああ、鳩は弱いからな。俺が守^{まも}ってやるよ”

盃を交^{まじ}わした後に言^いわれた言葉が、頭の中で大きく響く。

呆^{あっけ}気にとられる鳩の目の前で、するりと襖は閉^とじられた。その向
こ^まう側で、何やら烏天狗とリクオが言^いい合^あっている声^{こゑ}が聞^きこえる。
とい^いつても、一方的に烏天狗の声^{こゑ}が聞^きこえるだけだ。

リクオはいつものように烏天狗の小言^{せうごん}を聞^き流^{なが}しているに相違^{ちが}な
い。

遠^{とほ}くな^つた烏天狗の声^{こゑ}が「リクオ様　　！！」と叫^{こゝろ}んだ。

一^{いっ}体^{たい}あ^の堅^{かた}物^{ぶつ}に何^{なに}を言^いつたのやら。

そ^う思^{おも}つと、自然^{しぜん}と鳩^の顔^{かほ}にも笑^{わら}みが浮^うかぶ。

「制裁^{せいざい}なんか屁^へでもねえ。そ^んと^きゃあ覚^さ悟^ごしとけよ、リクオ」

その言葉^{ことば}が実^{じつ}行^{ぎやう}に移^{うつ}されたのは、それからしばらく経^へつてから
。

(1)

夜リクオ、鳩と酒を酌み交わす。(後書き)

はい！！補完小説「盃」これにて終幕でございます。

ここまで読んでくださった方々、誠にありがとうございました。

い、如何でしたでしょうか。

時系列的には、四国百鬼夜行による騒ぎが、鎮火し始めた頃でしょうが。

小説の血血木のお話の、少し後。または置いてけ掘りのお話の、少し後。だろうと思って、書いていたのだと思います。

なんせこれを書いたのは去年の夏……くらいであったと思いますから……。

ここに載せさせて頂く際に、多少書き直しは行つたのですが……何か気になる点や文章の講評等ございましたら、お知らせくださると誠にありがたいです。

皆さまのご感想、どしどしお待ちしております。

私はそう早く量を書ける方ではございませんが、何卒、これからもよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9221t/>

盃

2011年6月12日15時40分発行